

## 第52回 パールレース ホライズン優勝レポート

ナカサイ タツミ  
中齋 龍美



前列：左から筆者・中齋 龍美、オーナー・邨瀬 愛彦、奥平 泰昌  
後列：左から 中根 藤太、荒川 海彦、高木 裕

ホライズンでパールレースに参戦するって、マジですか？ ホライズンでヨット始めて37年、1987年にパールレース総合優勝した後、ステップアップを狙い今のホライズン6に替えた。しかし同時に、次の夢である海外レースへの挑戦をベンガルIIでスタートしたため、外洋やロングレースはベンガルの出番となった。今年はトランスパックからの回航中で、ベンガル7は太平洋を走っている。オーナーはじめオリジナルメンバーが還暦を迎えた今年は、原点に戻りホライズンでの挑戦を決めた。ホライズン（横山30R）は、23年前のIORレーサーで、ずっと外洋からは遠ざかっていた。航海計器はアナログコンパスとGPSのみ、スピードメータ、シートバックの取り付けを、スタート日の朝完了、20年ぶりの外洋への挑戦なので、ランナー、シートストッパー交換し、セールは、メイン、ミディアムヘビー、スピンを新調。ドタバタの突貫工事であったが、何とか様になってきた。レーサーなのに今どき風向風速がなく、見劣りがする。でも「風は感じるものさ」と言ってみたくなる。だんだん気合が入る。面白いじゃないか。

メンバーは6名 トランスパック帰りは、邨瀬オーナー、福岡から高木（裕）、関東から荒川（海）の3名。オーナーの甥で最近子育てに忙しい中根、そしてオーナーと同級生の還暦5人組から、奥平と中齋。それにしても邨瀬オーナーのヨットレースにける情熱は半端ない。トランスパック帰国直後のパールレースへのハーフトンでのチャレンジである。何よりもヨットレースが心底好きなのであろう。

レース前夜の作戦会議では、予報によるとスタートから夜中まで、西風10ノット、ピークは20ノット。その後、風は北にシフトし落ちる。5ノットの風で上りとなる展開が予想された。軽風志向のホライズンなら結構楽しめそうで期待が膨らむ。我々はロングレースでは、最後まで諦めないことをモットーとしている。パートに区切って、気持ちを切り替える。スタートから御前埼、次は利島まで、そして江ノ島フィニッシュの3レグ構成である。「今年はホライズンで、来年はベンガルで連覇だ」派手な夢で盛り上がり、眠りにつく。

スタートラインは、圧倒的な下有利。リミットマーク付近でタイミングを計り、下一番で飛び出す。理想的なスタートであった。新品のメイン、ジェノアのシェイプが美しい。各艇がリミット側に集中して、罵声の飛び交う混乱が予想されたが、あっけなく静かにジャストスタート。「なぜか今日はラッキー、ついてるな」と感じた。風が弱いので、前後左右の艇のバランスを細かくチェックし体重移動する。スピンを展開して、布施田の沖の暗礁と暗礁との間を、最短コースで抜ける。スタートのアドバンテージから、少し前方にコンテッサも見える。この軽風をホライズン・ウインドと呼んで歓迎。今のポジションに満足し笑みがこぼれる。フォアデッキの中根は、確実な作業で安心感があり、常に正確にブローを読んで知らせてくれる。そのブローを拾いながら快調に滑る。

大王崎の沖で、まだトップ艇がかすかに見える。スピランで6～7ノット。この風が好きだ。強くも弱くもなって欲しくない。ホーネット（シーム31）、次にジュリアン（ファースト367）、その後はグレートピープル（ファースト31）と絡みながら走る。パラフレニアン（ファースト40.7）もまだ見える。本当にスタートは重要だと、あらためて痛感する。

離れずについて行きたいが、少しづつ開いていく。日没後も順調に7ノット・オーバーでスピラン。月の無い満天の星の下で、スピントリムに励む。「おお～ッ」時折大きな流れ星が、眼に入り歓声がある。流れ星に「このまま、このまま、この風で」と祈る。結局はこの風のまま真夜中を迎えて、徐々に風が落ちはじめた。パールレースお決まりのパターンだ。去年はベンガル7で、半日もの間のた打ち回った苦々しい思い出がある。今年もか？と不安が一瞬よぎる。

正面遠くに、かすかな灯りが見え始めた。だんだん近づくと本船かと思えば、いやはや驚きである。高いマスト灯のトップ集団ではないか。御前崎の沖で、12時間後の再スタートとなる。一同驚きで眠気は吹っ飛び、テンションは最高潮。ワッチ体制を無視し、風が無いのにオールハンズである。しかもこの超微風の中でも、ホライズンは滑り続けており、先行艇団の中央へ、そろり、そろりと割り込んでいく。

そういえば24年前のパールレースの大島では、先行艇団がカームに捕まり、潮に流され東京湾へ吸い込まれていた。そこに後ろから追いつき、かわして6着フィニッシュの総合優勝した記憶がよみがえる。ヨットの神様が後押ししてくれているのだろうか？

風が完全に止まり夜明けを迎えた。周囲が明るくなり他艇が視認できる。後ろに昨年優勝のシャロン（ビッテ31）がいる。良いポジションだ。御前崎までの第一レグは、大きなアドバンテージを得た。レーティングの高い艇と競り合っているので気分が良い。朝風の中で、皮をむいた冷たいリングが配給された。シェフ奥平だ。真夜中のドラマから、興奮で夜食も忘れていたため、久しぶりの食べ物で美味しい。マネージャーの奥平は、ふだん組長と呼ばれる強面だが、シェフからロールコールまでこなす有り難い存在だ。

昼までジェノアで風が無くバタバタ苦しんでいたが、遠く沖に風が見える。予報の北ではなく、シーブリーズが吹いてきそう。沖出ししたはずのホーネットが気になる。風が入って石廊崎に向け、スターボのクローズホールドで快走を始めた。この風を祝福するかのよう、シーラが群れで海面を跳ね回っている。風も上がってきた。この走りですっかりヒールを起こせば、艇速は0.3ノット早くなる。「ここは頑張りどころです。重心をもう一つ外へ！」トリマーの荒川から指示がとぶ。若いベストセーリングの追求は厳しく容赦ない。トランスパックの10日間を経験した直後なので、「180マイルは朝飯前」という。頼もしいトランスパッカーだ。

石廊崎の手前でポートにタックし利島に向ける。シャロンとジョーカーII（シーム33）と至近距離でミートする。シャロンは荒川（弟）がヘルムをとっている。荒川兄弟の対決だ。そういえば荒川（父）は24年前の優勝メンバーの一人。だじゃれ連発の荒川（父）の明るい笑顔が浮かぶ。ジョーカーIIはラグーナ蒲郡での隣のバースの仲良しさん。「ここまで来て、身内の仲間らと競り合うとは・・・」邨瀬オーナーがつぶやく。外洋レースは離合集散が常とはいえ、何かのご縁を感じる。お仲間といえど「レーティングの低いホライズンをここで見たら、ショックだろうね」と話しながら、「今でちょうど半分。まだこの先ドラマが必ずあるはず」と慢心を諫める。ケットフィーク（X35）が追い越していく。利島に南からアプローチするココリン（エリオット16）も遠くに見える。時折波の悪い海面がある。ホライズンは苦手で、波に叩かれて遅れていく。二日目の日没となる。利島の回航は、微風の暗闇のなかで、シャロンとタッキングマッチ。利島は真っ暗で高くそびえたち、明かりが無く不気味な感じだ。

利島を苦労しながら回航し、北寄りの弱い風のなか、大島のブランケットに注意しながら北上していく。「まだまだ、これからが勝負だ」邨瀬オーナーの檄がとぶ。最終レグの江ノ島アプローチの開始だ。風が弱いので苦しいが、風早を過ぎてスターボに返すと、風がシフトし、江ノ島に向けられるようになった。風も上がってきた。これまでほとんど波の無い海面で、中軽風のホライズン・ウインドに恵まれ、すべて順調にレース展開してきた。ところが雷とともに突然のドシャ降りとなる。前が見えない豪雨のなか、艇速は上がる。雨が止み、さらに風が強まり20ノットが正面から吹き、波も高くなってきた。ミディアム・ヘビーでは明らかにオーバーパワーであった。しかし上手に風を逃がしながら、パワフルに走る。高木ヘルムスは、さすが元五輪選手で百戦練磨の戦士。この風とセールでも素晴らしい舵取りでヒールアングルを一定に保つ、タクティクス、セールトリム指示も的確で、常に冷静沈着である。それでいて、いつも、誰にでも優しいスーパーセイラーである。

この状況のなか、「ホライズンよ、マスト、ステー、古いままだが頑張ってくれ、壊れないでくれ。」これが最後の試練といいきかす。ずっと併走してきたアップルVI（シドニー32）にフィニッシュ手前で前に出られる。06時30分36秒、25着（全46艇中）のフィニッシュ。42時間のレースで、二位のパラフレニアンとは、修正で24秒の僅差であった。24年前は13秒差と、いつもながら激しい戦いである。

ヨットレース大好きで37年続けてきた我々に、ヨットの神様からのプレゼントであると思い、本当に嬉しく思います。これからもレースへのチャレンジ続けるよう、エールをいただいたと受け止めています。レース活動を永く続けてこられたのは、チームが良くまとまっているからだと思います。その中心にある邨瀬オーナーの人柄と情熱が求心力となり、その飽くなきチャレンジ精神が、チームメンバーに刺激と発奮を与えてきたと思います。これがチームの特徴です。チームは好奇心、探究心、挑戦意欲、オーナーを筆頭に益々盛んです。今後も新たなチャレンジ続けていく覚悟です。

素晴らしい企画と運営をしていただいたレース関係者の皆さん、そして突貫工事で参戦準備に協力いただいた石川社長はじめ(株)ハリケーンの皆さまに、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

次の世代に繋いでいきながら、ヨットレースがさらに盛んになるよう、微力ながら活動を続けていきたいと思っています。では、またレースでお会いしましょう。      ボン・ボヤージュ